プラン・ニュース［2019 Summer］NO.111

PLAN NEWS

支援者インタビュー

眞鍋かをりさん

ジンバブエのチャイルドの
スポンサーとして

プランのコミュニティ開発

ネパール

合言葉はネットワーク
～息の長い活動だから築けるもの～

ジンバブエ

暴力のない学習環境を

発行：公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン

支援者インタビュー

眞鍋かをりさん

タレント

取材時に、職員から最新のチャイルドの「一年の歩み」を渡されて。「支援を始める前は遠い存在だったジンバブエが、身近な存在へと変わりました」



Profile

まなべ・かをり
1980年愛媛県生まれ。横浜国立大学卒業。大学在学中からタレント活動を始める。バラエティに加え、報道・情報番組のコメンテーター、CMや執筆などマルチに活躍。エッセイストの犬山紙子さんらとともに、子どもの虐待防止策を求める署名キャンペーンなどを行ったことでも注目される。2014年10月からスポンサーになり、ジンバブエのチャイルドを支援している。

子どもの虐待防止策を求める署名キャンペーンを行うなど、国内の子どもの問題にも取り組んでいるタレントの眞鍋かをりさん。2014年からプラン・スポンサーシップを通じ、ジンバブエの女の子のスポンサーとして、成長を見守り続けています。チャイルドとの交流の様子や児童虐待防止の運動を通じて感じたことをうかがいました。

聞き手：広報マーケティング部　寺田聡子 職員　撮影：金井塚太郎

「みんなの小さな力もたくさん集まれば国や世界を動かすと信じています」

――スポンサーになろうと思ったきっかけを教えてください。

眞鍋かをりさん（以下名前と敬称略）テレビのドキュメンタリーで、途上国の子どもの窮状を伝えるものをたまたま目にして。学校に行かずにずっとゴミ拾いをしている女の子の姿などを見ていたら、涙が止まらなくなりました。そして、何か自分にできることがしたいと、即、インターネットで検索をして、プラン・インターナショナルに出会いました。

――世界の子どもたちの窮状を知っても、アクションに結びつかない人もいます。眞鍋さんは、すぐに行動を起こされました。

眞鍋　18歳で芸能界に入ってからしばらくは、日々、自分のことで精一杯でした。弱肉強食の世界だったので（笑）。30代になってそれがひと段落つき、周りのことも考えられるようになったタイミングだったのだと思います。

――そして、ジンバブエの女の子のスポンサーとなられ、チャイルドから初めて手紙をもらったときは何をお感じになりましたか？

眞鍋　チャイルドの写真も入っていましたが、ジンバブエどころかアフリカに行ったこともないので、遠い国から手紙が来たという不思議な感じでした。それから私自身出産をして忙しくなり、手紙を出せなくなって。しばらくして「子どもができてなかなか手紙が出せなかったんですけれど、今、2歳の子どもを育てています」と伝えたら、チャイルドのお母様から「子育ては大変ですか？」みたいなお返事をいただいて。うれしかったですね。また、チャイルドの「一年の歩み」が定期的に送られてくるので、遠い国だと思っていたジンバブエのこともだんだん身近に感じられるようになってきました。「支援によって子どもたちが教育を受けています」と書いてあるのを読むと、ものすごく安心しますね。

――ご自身の出産を機に、支援へのむき合い方に変化はありましたか？

眞鍋　そうですね。自分に子どもができると、必要としている子どもに必要なものが届くのは大切だと、改めて思うようになりました。

――海外ひとり旅が趣味で、多くの国を回られたそうですね。

眞鍋　独身時代はアジアを中心にたくさん旅をしました！　観光地っぽくないところを訪れるのが好きで、カンボジアで孤児院を見学したこともあります。信じられないような劣悪な環境のところもあり、ショックを受けましたね。一方、ミャンマーでは片田舎の村をガイドの自転車の後ろに乗って探索したりしました。そのガイドには結局、想定外のお金を請求されましたけど（笑）。村の人が素朴だけど幸せそうに暮らしているのを見るのが楽しかったです。

――いつかジンバブエも訪問できるといいですね。もしチャイルドに会ったら、どんなことを話したいですか？

眞鍋　健やかに大きくなってくれていたら、それを見られるだけでうれしいですね！　私には毎月お金を寄付するくらいしかできないけれど、それが少しでもその子の成長の助けになっているのだったらよかった、と感じると思いますす。ジンバブエとつながりができて、女の子の成長に喜びを感じられる。プラン・スポンサーシップは、支援する以上にいただいているものが多いように思います。

――両親からの虐待により命を落としてしまった5歳の女の子の事件を受け、子育て中の著名人の方々と一緒に児童虐待防止の運動をされています。ＳＮＳ上で「こどものいのちはこどものもの」というハッシュタグを用いた虐待防止策を求める署名キャンペーンを行われましたね。

眞鍋　「虐待を何とかしたくて仕方がない」という多くの声を国に届けたいと思って、エッセイストの犬山紙子さんを中心に立ち上がりました。助けたいという思いがあっても、それを実行に移さなかったらもったいないという気持ちもありましたね。私たちは児童虐待の専門家ではありませんが、皆が声をあげられやすくするなど、社会のムードを変えることには貢献できるのではないかと考えています。

――キャンペーンを始めて、周りの反応はいかがでしたか？

眞鍋　「動いてくれてありがとう」とか「応援しています」という声をたくさんいただきました。本業である、芸能活動に対して以上にかもしれません（笑）。最終的には、ＳＮＳ上に５０００件以上の要望が集まって、厚生労働省に届けました。そこから、「虐待について閣僚会議がありました」とか、「こういう改善案が出て予算が付きました」とか、実際に連絡をいただいています。みんなの声が国に届くことで、少しずつでも着実に何かが変わっていくのだと思いました。実は、スポンサーを始めたときはあまり自信がなくて。というのは、自分の一つの行動で何が変わるんだろうとか、支援している子どもは本当に幸せになるのかな？　など不安になる部分があったんです。でも、今は、みんなの小さな力もたくさん集まれば国や世界を動かす大きな力になると信じています！



2018年に、SNS上で「こどものいのちはこどものもの」というハッシュタグを用いた虐待防止策を求める署名キャンペーンを実施。5000件以上の意見がハッシュタグとともに寄せられた

ネパール

合言葉はネットワーク ～息の長い活動だから築けるもの～



カルナリの妊婦グループから歓迎を受ける篠原職員

プラン・インターナショナルが2017年に新たに活動を開始した
ネパール中西部のカルナリ（旧ミッドウエスタンヒルズ）活動地域と、
1994年に活動開始し、2019年6月に活動を終了した東部のモラン活動地域。
異なる2つの活動地域で共通するキーワードは「ネットワーク」。
プラン・スポンサーシップならではの長期的な地域開発の活動と成果についてレポートします。

レポーター　リレーション開発部　篠原茜 職員





カルナリのコミュニティにて。自分の考えを話す女の子と、見守る母親たち

ネパールってどんな国？

南部の平原、中央部の丘陵、北部の高山地帯の3つの地域に分かれています。100を超える多様な民族やカーストがあり、多くの種類の言語が話されています。先住民族や貧困世帯の子ども、障がいのある子ども、女の子など、社会的に弱い立場に置かれた子どもたちの生活は過酷な状態にあり、また、都市と農村では著しい地域格差がみられます。

活動をはじめたばかりのカルナリで

カルナリでは山岳地帯を走るハイウェイが人々と他地域をつなぐ唯一の生活道路。農業が生計手段です。ほかの地域と同じように男女の性別役割や女の子への差別が根強く存在しています。

女の子が直面するリスク

法律で禁止されている「チャウパディ」の慣習が今も残っていることが象徴的です。これは生理中の女性と女の子は「不浄」とされ、家畜小屋など家族と離れた場所で5～7日間過ごす慣習です。衛生的とは言えない環境で過ごすため、感染症やときに死に至るほどの重篤な病にかかる危険にさらされています。

若者たちの力を結集

こうした現状を打開するため、プランが地元のパートナー団体とともに第一に取り組んでいるのが、子どもや若者たちの組織づくりと能力強化です。

地域でのジェンダー平等実現を主導する女の子と男の子のグループ、チャンピオンズ・オブ・チェンジのメンバーに話しを聞きました。多くの女の子は「親から家事労働の担い手として期待される上に早く結婚するよう望まれており、学業との両立が難しい」と答えました。一方、男の子からは「家畜の放牧が大変、男は妻と子どもを養わなければならないから大変」といった声が。なかには、「女の子は重い籠を背負って畑仕事を手伝っているのが大変そう」「チャウパディがなくなればいい」と話すなど、活動を通じて、女の子の問題を「自分事」として捉えはじめている男の子もいました。

徐々に広がるネットワーク

プランは現在、チャンピオンズ・オブ・チェンジのほか、教育や子どもの保護のプロジェクトに、地域の人々や行政とのネットワークを強化しながら優先的に取り組んでいます。その主役は地域を変えていく若い世代です。プランと彼らの挑戦は始まったばかりですが、確かな変化の兆しを感じながら、カルナリ活動地域をあとにしました。

25年間の活動を経たモランで

ところ変わってモランは25年間、プランが活動した地域。標高の高いカルナリと異なり、見渡す限りの平原地帯です。2つの地域に共通して感じたことはどちらも「ネットワーク」がカギということです。

行政や子どもクラブが連携

モラン活動地域では、当初、4つだった子どもクラブは13に増えました。現時点での課題について、メンバーのスザンさん（17歳）は「子ども大人問わず飲酒の問題があります。また、早すぎる結婚にも目を光らせておかなければなりません。リスクを発見次第、必要に応じ行政や警察への相談、通報を引き続き行っていきます」と答えました。さらに、10代後半～40代までが参加する若者クラブのリーダー、クリティさん（40歳）は、今後は複数の若者クラブのネットワーク化を図ることにより、地域の課題のより迅速な解決を図りたいと話してくれました。

女性のエンパワメントも進化

また、結成8年目の女性の貯蓄貸付グループからは、かつては家庭や社会で意思決定の機会がなかった女性たちが、今では「私たちはひとつ」という一体感のもと、行政から女性の能力開発のため拠出される予算の使途の透明性まで監視している、という話を聞きました。

ネットワークが広がりはじめたカルナリと比べ、モランではそれが確立され、自らが進化の担い手という新たなステージに立っていると感じました。



モランの女の子たちに、未来のカルナリの子どもたちの姿を重ねて

視察を終えて——

**カルナリにモランの過去を、
モランにカルナリの未来を見る**

モランを訪れた際、試験が終わって友人と連れ立って歩く制服を着た女の子たちを目にし、胸がいっぱいになりました。カルナリでは学校に通う子どもより、働く子どもの姿を多く見たからです。カルナリの女の子に「将来どんな地域になってほしいか」と質問したとき、「これからも学校に通い続けたい」と彼女の夢を話してくれました。モランのようにカルナリでも多くの子どもたちが学校に通えるまでには息の長い地道な活動が必要です。カルナリの子どもたちの未来をぜひ一緒に応援していただけますよう、よろしくお願いいたします。

CHAMPIONS of CHANGE



チャンピオンズ・オブ・チェンジのメンバーの男の子たちと篠原職員

カルナリでのチャンピオンズ・オブ・チェンジの活動

自尊心の向上、ジェンダー平等についての知識を深めます。早すぎる結婚やチャウパディについての街頭劇を上演するなど、地域での意識啓発にも取り組んでいます。活動一年を経て、メンバーは大人に対して自分たちの意見を言えるようになり、有害な慣習の危険性を訴えられるまでになりました。

参加者の声

ジャナキさん（14歳）

「グループの活動に参加し、チャウパディが有害な慣習であることを知りました。両親を説得し、今では生理中は、両親とは別の部屋ではあるものの家の中で過ごせるようになりました」



illustration by Noriyuki Goto

ガールズ・プロジェクト物語「人身取引と女の子たち」

人身取引は女の子が直面する深刻な問題のひとつです。
西アフリカのブルキナファソに住むある女の子の
物語を通じて、現状をお伝えします。



15歳の女の子アデルは、両親と4人のきょうだいと一緒に、町から遠く離れた小さな村で暮らしていました。家族は農業で生計を立てていました。経済的な理由に加え、幼いきょうだいの面倒をみる必要があるため、アデルは小学校を4年生までしか進級できませんでした。ある日、両親は多くの村人と同様に、隣国のコートジボワールに出稼ぎに行くことになりました。それ以来、アデルときょうだいは叔父さんの家に身を寄せていましたが、やがて、両親からの連絡は途絶えてしまいました。

叔父さんは、アデルたちきょうだいの面倒をみませんでした。アデルは幼いきょうだいのことを考えて、少しでも収入を得ようと仕事を探します。しかし、読み書きや計算などが十分にできず、特に技術をもたないアデルは仕事を得ることができませんでした。



そんなとき、村のある男性がアデルの家にやってきました。「コートジボワールとの国境近くには、金鉱がある。多くの人が集まっていて、町が栄えている。賑やかだし、仕事もたくさんあるから、働いてみないか?」と誘います。アデルは幼いきょうだいたちを思い、村を出て働くことにしました。その村の男性の「お金が手に入る」という言葉を信じて、一緒に金鉱の町にむかいました。



金鉱の町は仕事やチャンスを求めて集まった人々で、大変な賑わいです。町の中心はホテルや食堂が立ち並び、栄えています。しかし一方で、女の子や若い女性が金鉱で強制的に働かされたり、性産業に従事させられたりしていました。

アデルはこうした事実を知らないまま、金鉱の町に到着しました。

町につくと、村の男性はアデルを別の男性に引き渡しました。アデルの最初の仕事は、その男性の家で家事使用人として働くことでした。数週間、朝から晩まで働きました。ある日、雇い主から、町の中心にあるホテルに行くようにと言われました。



新しい職場だと思ってホテルを訪れたアデルは、ホテルの経営者を尋ねました。そのときに、偶然パトロールをしていた「子どもの保護委員会」のスタッフが、アデルの行動を不審に思い事情を聞きました。



スタッフは話を聞いて、アデルが典型的な人身取引に巻き込まれていることに気づきました。以前にも同様の事件がこのホテルであり、「子どもの保護委員会」が注意をしていたのです。アデルは保護され、性的搾取の被害には遭うことなく、村に帰ることができました。



その後、アデルはプランの支援で職業訓練を受けることになりました。また、出稼ぎに潜む危険について、同世代の女の子たちに伝える役目を担いました。アデルは助かりましたが、女の子が搾取の犠牲者になるケースは絶えません。女の子だけではなく、地域全体が取り組む必要がある問題なのです。

人身取引は女の子の尊厳を奪う深刻な人権侵害の形態のひとつです

解説：プログラム部　榎田真季 職員

人身取引は非人道的行為であり、犯罪です。性的搾取や労働搾取目的の人身取引を含む強制労働の被害者は世界中で2,090万人と推定されており、(※1)被害者の約70%が女性と女の子です。(※2)ブルキナファソでは、金採掘場や農場における子どもの労働搾取が深刻で、特に女の子は金鉱近くにある町の性産業に従事させられています。このプロジェクトでは、人身取引から救出された女の子たちの支援や防止にむけた地域の人々への啓発活動を通じ、女の子の尊厳が守られる地域づくりを目指します。ぜひ皆さまの温かいお力添えをよろしくお願いいたします。

※1 ILO (2012), ILO Global Estimate of Forced Labour（この推定値には臓器摘出や強制結婚目的の人身取引の推定値は含まれていません）
※2 UNODC (2018), Global Report on Trafficking in Persons 2018

新しいガールズ・プロジェクトがスタート!

ご支援をよろしくお願い申し上げます

- 搾取による心身のダメージを防ぐ「**女の子が売られない社会づくり**」プロジェクト（ブルキナファソ）
- 早すぎる結婚や暴力を防ぐ「**シリア難民の女性の安全な居場所**」プロジェクト（ヨルダン）

2019年7月から新プロジェクトが始まります。活動内容の詳細は同封チラシもしくはウェブサイトをご覧ください。
https://www.plan-international.jp/join/girls/

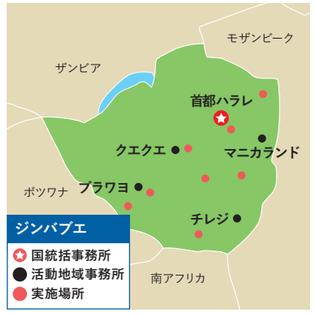
ジンバブエ

学校設備の充実と体罰のない教育を目指す

ジンバブエでは、依然として体罰がしつけの一環として用いられています。
学校では71%の教師が体罰を行っているといわれ※、家庭でも保護者がもっとも有効なしつけとして体罰を容認しています。
また、学校設備が足りていないことも深刻です。今回は、このジンバブエでのプロジェクト立ち上げまでのステップを
現地に駐在するプログラム部の村松良介職員がレポートします。

ジンバブエとはどんな国？

1980年に英国から独立。90年代の後半以降、経済政策の失敗による混乱、国際社会からの孤立、自然災害やHIV／エイズの蔓延などにより、深刻な貧困問題を抱えています。
（マニカランド活動地域、クエクエ活動地域など、8地域で実施予定）




現地の学校の子どもたち

暴力のない学習環境を

ジンバブエに赴任すると、澄んだ青空や豊かな自然、そして優しい同僚が私を迎えてくれました。

首都から車で40分ほど離れた活動地域では、人々が簡易なレンガ造りの住居に住み、露店で野菜などを売って家計を助ける子どもたちも多く見られます。この地域は学校の数が足りないうえ、日常的な体罰により、心身の健全な成長の阻害、学習意欲の低下に繋がっています。

暴力のない安心・安全な学習環境をつくることは、子どもたちの学びの実現と健全な成長のために不可欠です。子どもたちが生まれた環境のために夢を諦めないでほしい、その願いを胸に日々奔走しています。


熱い思いを胸に奔走する村松職員


情報を書き出して整理しながら、問題点を洗い出す

Step 1
課題整理

中学校設備の不足や教師による体罰が明らかに

国や地域にどんな課題があり、どのような支援が必要なのか。まず、プラン内で徹底して話し合い、問題意識を共有します。同時に文献調査を行い、問題を裏付けるデータを収集していきます。

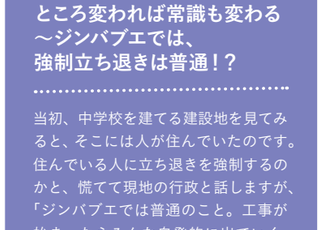
その結果、
・中等教育就学率が約44％にとどまっていること（初等教育就学率は約86%）
・中学校の設備が足りていないこと
が分かりました。

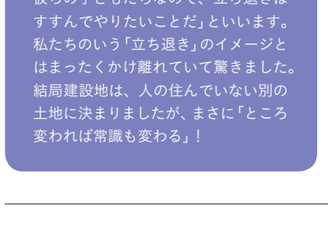
定員30人の教室に50~100人の生徒が肩を寄せ合って学んでいたり、学年によっては午前と午後の2部制をとっていたりと、現在の生徒数すら十分に受け入れられていない現状が見えてきたのです。

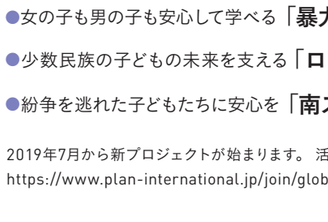
さらに、教師の体罰の問題の深刻さも明らかになりました。ジンバブエは国として、体罰を容認しないチャイルドフレンドリー・スクール・ポリシー（子どもにやさしい学校を目指す方針）を掲げているにも関わらず、実際には全国の教員の71%が生徒への指導として体罰を行っているというデータが見つかりました。

このように、第一ステップでは優先課題と対象地域の選定をすすめました。

※ 出典：Research on Addressing Social Norms that Underpin Violence Against Children in Zimbabwe (UNICEF、2016)


教師やコミュニティの人々とのミーティング


行政との話し合い


関係者全員を集めたミーティング

Step 2
プロジェクトの形成

学校設備の建設・修繕と、体罰に代わる教育法の導入

次のステップでは、地域のニーズを把握します。まず、プランが支援する学校を訪れ、本当に教室数が足りていないのか、体罰についてどう考えているのかなどを確認しました。そして、「もしほかに効果のあるしつけ方があるならば、体罰は止めたい」という声を聞きました。同時に、問題を解決するためのアプローチを考え、プロジェクトの骨子を組み立てていきます。プロジェクトとして実現可能なのか、どのような効果が得られるのか、そして終了後も住人たちの手によって効果を持続できるかなど、必要な事項を協議します。その結果、プロジェクト内容を以下の7点に絞りました。

プロジェクト内容

- 中学校設備建設と修繕
（新規建設対象1校、修繕対象2校）
- 褒めて伸ばす教育法のハンドブック・マニュアル作り
- 教師トレーニング（約200人）
- 地域住民や生徒への啓発活動（約9,500人）
- 「子どもの保護クラブ」の設立とトレーニング（約9,000人）
- 「保護者クラブ」の設立とトレーニング
- 子どもの保護メカニズムの確立と維持

Step 3
役割分担

役割と責任、ゴールなどを確認しプロジェクトを自分ごと化

プロジェクトが形成されたら、全員で目標やそれぞれの役割を確認し合い、目標達成にむけて足並みを揃えます。まずは、プロジェクトに関わるメンバーと2日間かけて活動やスケジュールのほか、守るべきルールやジェンダー平等の視点を取り入れることなど、必要なことすべてを確認しました。

次に、関係者全員を集めたミーティングです。ここでは現地行政や教育省を始めとする関連省庁、日本大使館など、より多くの関係者が参加し、ともにプロジェクトを推しすすめていく気運を高めます。

このようなミーティングを丁寧に行うことで、現地の人々にとって「自分たちのプロジェクト」という意識が高まります。参加者のひとりである現地行政の担当者からは、「プロジェクトの流れや守るべきルールがよく分かった。円滑にプロジェクトがすすむように出来る限りサポートしていく」という意気込みを聞きました。

Start!

そしてプロジェクトスタート！

**ところ変われば常識も変わる
～ジンバブエでは、
強制立ち退きは普通！？**

当初、中学校を建てる建設地を見てみると、そこには人が住んでいたのです。住んでいる人に立ち退きを強制するのかと、慌てて現地の行政と話しますが、「ジンバブエでは普通のこと。工事が始まったらみんな自発的に出ていく。ここに建つ中学校の恩恵を受けるのは彼らの子どもたちなので、立ち退きはすすんでやりたいことだ」といいます。私たちのいう「立ち退き」のイメージとはまったくかけ離れていて驚きました。結局建設地は、人の住んでいない別の土地に決まりましたが、まさに「ところ変われば常識も変わる」！

ご支援をよろしくお願い申し上げます

新しいグローバル・プロジェクトがスタート！

- 女の子も男の子も安心して学べる「**暴力のない中学校づくり**」プロジェクト（ジンバブエ）
- 少数民族の子どもの未来を支える「**ロヒンギャの子どもの保護と教育**」プロジェクト（ミャンマー・バングラデシュ）
- 紛争を逃れた子どもたちに安心を「**南スーダン難民の保護と衛生改善**」プロジェクト（ウガンダ・スーダン）

2019年7月から新プロジェクトが始まります。 活動内容の詳細は、同封チラシもしくはウェブサイトをご覧ください。
https://www.plan-international.jp/join/global/

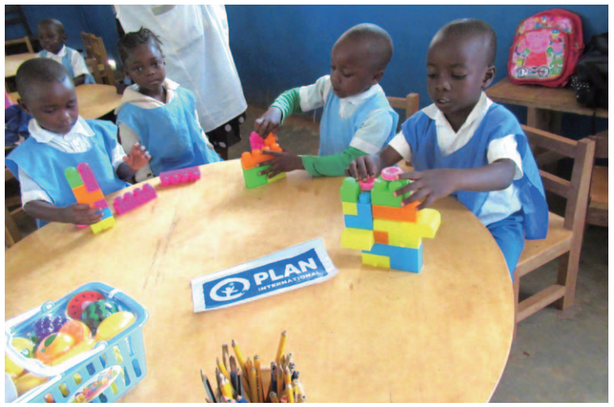


「教育が世界の貧困を救う」アフリカに3校建設が夢

継続的なご寄付とは別に、単発で使途を指定した
寄付をしてくださるご支援者も増えています。
アフリカの国々の教育を目的に個人でご支援くださっている
山川実香さんに、その思いをうかがいました。



山川実香さん



カメルーンに建設した幼稚園の園児たち

フランスを知ることで見えた、アフリカの貧困

アフリカの子どもたちの教育に貢献したい。その思いでオーダーメイド・プロジェクトを通じ、2010年にセネガルの学校建設と、2017年にカメルーンの幼稚園建設の支援をさせていただきました。

私がアフリカの貧困問題に目をむけるようになったのは、大学時代です。フランスの経済や政治を専攻していたのですが、移民問題を研究していくなかで、フランスの植民地時代と現在も続くアフリカの貧困問題が切り離せない事実を知り、この問題を解決するには教育が必要という考えに至りました。以降、「アフリカに学校を建設したい」という気持ちが芽生えたものの、学校建設には何億ものお金がかかり、政府や国際機関でなく、個人で実現するのは不可能だと思って諦めかけていました。

子どもたちからのメッセージがはげみに

ところが、あるとき勤務先のCSR担当者から、「企業連携をしているプラン・インターナショナルでは、アフリカをはじめとした途上国の学校建設の支援も行っている」という話を聞きました。それなら自分にもできると思ったのが、このプロジェクトへの参加を決めたきっかけです。

以降、コツコツお金を貯めて、9年前にセネガルの学校建設の夢が叶ったのです。いただいた報告書にあった「いい成績がとれるようにがんばります」「今まで校舎がなかったけれど、これから教室で学べることがうれしい」といった子どもたちの声を読んだときに、現地でも喜んでくれていることが分かって感激しました。その報告書は飾っていて、ときおり読み返しながら貯金を続けたことが、2校目の支援につながりました。

両親・祖父母の名前を併記した記念プレート

私の両親や祖父母は、私が望んだ習い事や書籍の費用は必ず出してくれました。そのときはわかりませんでしたが、大人になったいま、それは簡単なことではなかったと感じます。

両親や祖父母へのささやかな感謝の気持ちを込めて、開校時に設置される記念プレートの1校目には両親の名前を、2校目には母方の祖父母の名前を、私の名前に併記してもらいました。今後目標にしている3校目には、父方の祖父母の名前を入れたいと思っています。現地に行ったことがないので、いつか現地の学校を訪問したり、卒業生たちに会ったりもしてみたい気持ちもあります。でも、今はその渡航費用を3校目建設支援につなげられるよう、貯金に励んでいます。

「教育は世界を変えることができる」は私の信条です。アフリカの子どもたちが、学ぶことの楽しさを知る一助になればと願っています。



校舎に掲げられている、母方の祖父母の名前を併記した記念プレート

オーダーメイド・プロジェクトとは

学校や診療所、給水設備の新設など、ひとつのプロジェクトを個人や企業で「まるごと支援」できる支援方法です。教育・生計向上・子どもの保護など、多様な活動分野から関心をお持ちのテーマで、ご要望をお聞きしながら、活動国のニーズを勘案し具体的なプロジェクトの内容・予算などを決定していきます。活動地域を訪問し落成式などの記念イベントに参加いただいたり、成果物となる施設に記念プレートを設置することなどが可能です。

● お問い合わせ先：寄付受付・企業連携担当　Tel：03-5481-7100 / Mail：hello@plan-international.jp

「未来を背負っていく子どもたちのために、支援を続けます」

2009年から毎月、商品の売り上げの一部を途上国支援に
あててくださっている株式会社キャニオンスパイス。
代表の辻田さんに、きっかけについてお話をうかがいました。



辻田 誉さん　株式会社キャニオンスパイス　代表取締役社長

安心素材を使用しお客様の健康を応援

キャニオンスパイスは、オリジナルブレンドのカレーパウダーを使用したカレールウとレトルトカレーを製造・販売しています。

添加物を使用する食品が増えるなか、アレルギーを持つ子どもたちが増えています。そこで私たちは「人の健康を願っての商品開発」を経営理念に掲げ、できる限り食品添加物を使わず、安心安全な食材を使用した体に優しい商品を提供しています。

またホームページ上では商品の「原材料」「含有アレルギー情報」「材料の原産地」を掲載し、第三者機関による放射能物質の抜き打ち検査の結果も閲覧できるようにしています。

価格が高くなってもいいものを作りたい

支援をさせていただいているのは、「かぞくのためのカレーシリーズ」「mini。シリーズ」の売り上げの一部です。

12年前にシリーズで最初に発売した「こどものためのカレールウ。」は、1歳から食べられる、スパイスの刺激を抑えたカレーです。開発のきっかけは、私自身が幼少期アトピー性皮膚炎に悩まされた経験があり、食品添加物を使わない、お子様に安心して与えられる商品を作りたいと考えたことからです。

しかし、いい食材を使うほど商品価格は高くなります。そのため当初は「こんなに高いカレールウは売れるわけがない」と社内でも反対されました。それでも「わが子に安全なものを食べさせたいと願う親御さんには理解していただけるはず」と、販売に踏み切ったのです。



売り上げの一部がプランの支援につながる、「かぞくのためのカレーシリーズ」「mini。シリーズ」

チョコレートでひらめきました

「こどものためのカレールウ。」は、そうやって世に送りだした思い入れのある商品です。しかし、私には仕事をしていくなかで「なんのために仕事をしているのか」といったわだかまりがありました。自分のためだけでなく社会のためになる仕事ができないか、特に未来を背負っていく子どもたちのために何かしたいと思っていたのです。

子どもとお菓子を買いに行ったときに偶然プラン・インターナショナルの文字を見つけました。そこには売り上げの一部を支援に役立てているとあり、「これだ！」と思いました。すぐに事務所を訪ねて、同シリーズの売り上げの一部を支援にあてることになりました。

お客様から届いたうれしいコメント

年に数回、お客様にむけたプレゼント企画を行っています。その応募者の方から「パッケージを子どもに見せながら、『世界中にはお腹いっぱい食べられない子どもたちもたくさんいるんだよ』といった話をしている」とか「商品を購入している自分も間接的に途上国支援ができていると感じられてうれしい」といったうれしいコメントをいただくこともあります。

私たちは途上国支援のプロではありませんから、無指定寄付という形をとり、支援先や用途はお任せしています。小さな支援ですが、続けて10年が経ちました。もちろんこれからも継続していきます。

企業連携担当・奈良崎文乃職員からひとこと

10年間という長きにわたり、ご支援をいただいています。これまでのご寄付はアジアでの教育支援やアフリカでの食料支援など、そのときに必要としているプロジェクトに大切に使わせていただきました。「子どもの健やかな成長を第一に考える」という思いを、これからも途上国の子どもたちの支援につなげていただけたら幸いです。

● 企業連携に関するお問い合わせ先：企業連携担当　Tel：03-5481-7100 / Mail：hello@plan-international.jp



チャイルドに会ってきました！

チャイルドと過ごした時間は かけがえのない思い出になりました

昨年11月にチャイルドのコミュニティを訪問してきた飯島さん。
報告書や手紙での交流と、実際に会うことの違いを強く感じた旅だったそうです。

スポンサー **飯島華奈子さん**　チャイルド **トーラさん（訪問時16歳）**／カンボジア

卒業前に会えてよかった！

私が交流しているチャイルドのトーラは、もうすぐ「卒業」を迎えます。そんな彼女が手紙に「会いたいです」と書いてくれたのをきっかけに、コミュニティ訪問に行くことにしました。

当日は、プランの支援で建てられた小学校、保健センターなどを視察しました。建物やトイレ、給水設備などももちろん素晴らしかったのですが、それ以上に私が感銘を受けたのは、小学校で朝食と昼食が提供されているということ。子どもたちの健康面にまで支援が行き届いているのだなと感じました。

トーラと彼女の家族との対面は、コミュニティのパゴダで行われました。プランから送られてくる報告書などを見て「まじめでおとなしい子」と想像していたのですが、実際に会ってみると印象はまったく違います。控えめではあるけれど、自分のことをたくさん話してくれて、とても明るくキレイな女の子。将来は学校の先生になりたいという夢があり、学校から帰ると畑仕事のお手伝いをして、そのあと必ず勉強するのだそうです。

通訳を介しての会話だったこともあり、交流の時間はあっという間に終わってしまいました。訪問経験者の方からのアドバイスで、聞きたいことをいくつかメモしていたのですが、これは本当に正解でした。トーラはもうすぐ卒業してしまいますが、もし可能ならそのあと、彼女の弟がチャイルドになってくれるといいなと願っています。

※現在、チャイルドとの面会は、自宅ではなく学校などの集会所で行われています



仲のよい家族の様子を見ることができて幸せでした



訪問当日、学校はお休みでしたが、給食の様子を写真で見せてもらいました

プランの「PRサポーターズ」をご紹介します！

竹原理恵さん／田村 久さん

プランのPR活動をボランティアで支えてくださっているPRサポーターズの皆さんは、プランにとって非常に頼もしい存在。活動に参加してくださる思いについて、スポンサー歴15年の竹原さん、同30年の田村さんが語ってくださいました。

「この活動を始めたころに比べると、プランの知名度もだいぶ上がってきましたが、途上国の状況を知れば、日本の支援者はもっと増えるはず。プランにはこれからも積極的に発信してほしいですし、私もそのお手伝いができるよう頑張りたいと思います」（竹原さん）

「定年退職を機に、プランの活動を広めるお手伝いを始めました。途上国の現状はあまり変わっていないように思いますが、日本の人たちが途上国のことを気にかけるようになってきたと感じています。これからもさまざまな場でプランのPRを続けていきます」（田村さん）



PRサポーターズの竹原さん（右）と田村さん（左）

世界のプラン

アジア地域のプランのメンバーが集まりました



若者のニーズをプレゼンするユースの代表

2019年4月、日本や韓国、インドなどアジアを拠点とするプラン・インターナショナルのマネジメント・チームによる「アジア・フォーラム」会議が大阪で開催されました。この会議の目的は2030年までのアジアでの戦略づくりと連携強化です。SDGs（持続可能な開発目標）の時代に入り、従来の「支援する国」「される国」という枠にとらわれず、ともに一体となって喫緊の課題に取り組む新たな枠組みをアジアからスタートすることで合意しました。

この会議にはプランの活動の主体である若者も参加し、「政治などの意思決定プロセスに参加しやすい社会づくり」「デジタル技術を活用した活動」「女の子のリーダーシップの後押し」など、さまざまな意見が寄せられました。

アドボカシー

「G20」にむけた「C20」の活動に参加しました！



教育分野の分科会の参加者
（写真中央　アドボカシー担当 城谷尚子 職員）

2019年6月、大阪で金融・世界経済に関する首脳会合「G20サミット」が開催されました。これに先立ち、NGOやNPOなどの市民社会は、G20サミットの議論に多様な意見を反映してもらうことを目的にC20（Cはcivil＝市民のこと）を結成。10の社会課題別グループがそれぞれ提言を作成し、「C20政策提言書」として取りまとめ、4月に安倍首相に提出しました。プランは教育分野の日本コーディネーターとして世界中の市民社会組織と協力し、提言の取りまとめを担当。G20では、経済政策が優先的に議論される傾向がありますが、そんななかでもプランは特に、女子教育支援の必要性を訴えました。

COFFEE BREAK　職員が紹介するカルチャー

「世の中のすべての娘たち」がより大きな夢をもつために

紹介する人：リレーション開発部　竹崎恵 職員

「男の子、長男優先」という呪縛のもと、1980年代まで公然と女児中絶が行われていた事実に驚愕しました。この本が韓国で社会現象になったのは、主人公の体験を自分の痛みと重ねた人が多かったから。そして今、この小説は日本でも共感を集めています。著者の「あとがき」とあとに続く解説部分も必読です。「女の子だから」は途上国でも先進国でも、そして実は日本でも根深い問題であることに気づかせてくれる一冊です。



『82年生まれ、キム・ジヨン』

チョ・ナムジュ著
斎藤真理子訳
女性が人生で出会う困難、差別を描き、絶大な共感から社会現象を巻き起こした話題作！
筑摩書房

「東京マラソン2020チャリティ」チャリティランナー受付スタート！

プランは2019年に続き、「東京マラソン2020チャリティ」の29の寄付先団体のひとつに選ばれました。チャリティランナーの皆さんにご支援いただくのは、ガールズ・プロジェクトです。

プランのチャリティランナーになっていただくと、プラン評議員の増田明美さんによるランニングクリニックにもご参加いただけます（定員あり）。

皆さまの走りと思いを途上国の女の子たちの「生きていく力」にしてください！

詳細については直接プランまでお問い合わせください。

プラン・インターナショナルは、東京マラソン2020チャリティ事業の寄付先団体です。
東京マラソン2020チャリティ
公式ウェブサイト：
http://www.marathon.tokyo/charity



今年の東京マラソンの様子

プラン支援者の会からイベント開催のお知らせ

あなたも参加しませんか？

プラン広島の会 f

「お手紙書き会」（毎月第3日曜開催）

- 日時：7月21日、8月18日、9月15日、10月20日　14時～16時
- 会場：広島市まちづくり市民交流プラザフリースペース（2Fまたは3F）／広島市中区袋町6-36
- 内容：チャイルドへの手紙書き
- 参加費：無料、事前申込み不要
- 連絡先：小村
  Mail：naokomura@kej.biglobe.ne.jp

プラン長岡近郊の会

「ながおか市民活動フェスタ2019」へのブース出展＆スタッフ募集！

- 日時：9月7日(土)　10時～15時
- 会場：アオーレ長岡／新潟県長岡市大手通1丁目4番地10
  http://www.ao-re.jp/know/access/
- 内容：毎年5,000人以上の参加者がある市民活動団体のお祭り「市民活動フェスタ」にブース出展し、プランの活動をPRします。ぜひご来場ください。また、ブース運営にご協力いただけるボランティアスタッフを、次の通り募集いたします

【ボランティアスタッフ募集要項】
①午前参加　9時～12時30分／②午後参加12時30分～16時／③終日参加　9時～16時（搬入、搬出を含む）
※①②③いずれの時間帯でも結構ですので、ご協力いただける方は、8月9日(金)までに下記へご連絡ください。たくさんのご応募をお待ちしております！

- 連絡先：熊倉
  Mail：n-kumakura@nifty.com

プラン岡山の会 f

「手紙書き会」

- 日時：9月8日(日)　13時～16時
- 会場：岡山県生涯学習センター（予定）
  http://www.pal.pref.okayama.jp/
- 内容：秋の手紙書き会を行います。チャイルドの近況報告をしながら、ご一緒に手紙を書いてチャイルドに送りましょう。チャイルド番号、スポンサー番号がわかるものをお持ちください
- 参加費：300円（1家族）※手紙の材料によっては一部実費（100～200円程度）をいただきます
- 申込み：不要ですが、事前にお知らせいただけると助かります
- 連絡先：プラン岡山の会　お世話人会
  Mail：plan.okayama@gmail.com

※フェイスブックのページは、アカウントがなくてもご覧いただけます。手紙書きに使用できる写真を載せています

プラン・札幌の会

「プラン職員による活動報告会」

- 日時：9月14日(土)　13時～16時
- 会場：かでる 2・7　9階940会議室／札幌市中央区北2条西7丁目
- 内容：プラン職員による活動報告、参加者同士の交流
- 参加費：無料、事前申込不要（直接会場へお越しください）
- 連絡先：西崎
  Mail：i-nisitaka@softbank.ne.jp

プラン名古屋の会 W f

「国際交流フェスティバル“ワールド・コラボ・フェスタ2019”」に今年も参加します！（予定）

- 日時：10月12日(土)～13日(日)　10時～18時
- 会場：オアシス21「コラボ広場」一般ブース／名古屋市東区桜1-11-1
- 内容：プランの紹介と資料配布をします。お気軽にお立ち寄りください。たくさんの方の来場をお待ちしております

※両日とも終了後、懇親会（夕食会）があります。どなたでも参加自由です。ぜひおいでください

- 参加費：無料
- 連絡先：プラン名古屋の会
  Mail：info@plan-nagoya.sakura.ne.jp
  TEL：090-8076-2278（安藤良一）

プラン千葉 W

「秋の例会」

- 日時：10月20日(日)　13時15分～16時
- 会場：千葉市民会館会議室　http://www.f-cp.jp/shimin.html
- 内容：チャイルドへの手紙書き、ほか
- 参加費：プラン千葉の会員・非会員にかかわらず、一律500円(1人)
- 定員：先着30名

※参加ご希望の方は、10月18日(金)までに下記へご連絡ください

- 連絡先：前田
  Mail：e_maeda@yellow.plala.or.jp

W ウェブサイト f フェイスブック
上記アイコンのある会については、以下のプラン・インターナショナルウェブサイトから、各会のページにリンクできます
https://www.plan-international.jp/supporter/plankai/

■ 支援者の会に関するお問い合わせ先：
リレーション開発部　TEL：03-5481-6100

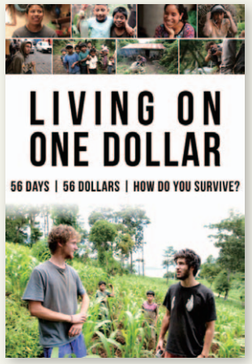
夏休み読書感想文コンクール2019「内なる力。勇気がわく夏。」

今年で6年目を迎える中高生のための夏休み読書感想文コンクール。ご家族、知人、学校の先生などにもぜひお知らせください。過酷な環境に置かれている途上国の子どもたちや女性たちの声に耳を傾け、よりよい世界をつくるために自分に何ができるか、感想文を通じて発信してみませんか。

【募集期間】
6月20日（木）～9月11日（水）（必着）
【課題図書】
『夢へ翔けて　戦争孤児から世界的バレリーナへ』（ポプラ社）
『橋の下のゴールド　スラムに生きるということ』（高文研）
『マラス　暴力に支配される少年たち』（集英社文庫）
『わたしは13歳、学校に行けずに花嫁になる。未来をうばわれる2億人の女の子たち』（合同出版）
『Because I am a Girl　わたしは女の子だから』（英治出版）
【審査員長】
角田光代氏（直木賞作家／プラン・インターナショナル支援者）
【応募方法】
下記のウェブサイトより応募書類をダウンロードし、必要事項を記入のうえ、作品と一緒に郵送してください。海外から応募の場合のみ、メールに添付してお送りいただくことも可能です
www.plan-international.jp/dokusho
【お問い合わせ・郵送先】
〒154-8545　東京都世田谷区三軒茶屋2-11-22 サンタワーズセンタービル11F
プラン・インターナショナル
「読書コン2019」係
TEL：03-5481-0030
Mail：voice@plan-international.jp
※詳細は同封のチラシやウェブサイトをご覧ください



今年も多くの中学生・高校生の参加をお待ちしています！



映画『1日1ドルで生活』のポスター

国際ガールズ・デー企画

映画『1日1ドルで生活』自主上映会の開催にご協力ください！

2019年の国際ガールズ・デー（10月11日）では、映画配給会社のユナイテッドピープル株式会社（代表取締役：関根健次氏）とともに、映画『1日1ドルで生活』の上映会を全国100カ所で開催することを目指します。

2019年10月1日（火）～31日（木）の期間中、自主上映会の開催にご協力いただける方は、下記の連絡先までお問い合わせください。上映会の開催を通じて、世界の子どもたちや女の子が直面している課題を、多くの方々に「知って」「関心をもって」「賛同」してもらう機会にしませんか？

【自主上映会の申し込み・お問い合わせ】
ユナイテッドピープル株式会社
TEL：090-8833-6669
Mail：contact@unitedpeople.jp
※上映会の主催者募集に関する詳細は、以下をご覧ください
https://www.plan-international.jp/news/girl/20190621_16965/

【上記以外に関するお問い合わせ先】
TEL：03-5481-0030
Mail：hello@plan-international.jp

今年も「書き損じはがき・未使用はがきキャンペーン2019」へのご協力ありがとうございました！

11回目を迎えたこのキャンペーンは、書き損じたり、使わないまま残っていたりした未投函のはがきを送っていただくことで、途上国の子どもたちを支援するというもの。2018年12月～2019年2月の実施期間中、今回も9つの学校の有志がボランティアとして協力してくださいました（右下のリスト参照）。そして、計3万4,213枚のはがきが集まり、142万4,136円のご寄付へとつながりました。いただいたご寄付は、女の子が直面する問題に焦点を当てて解決を目指すガールズ・プロジェクト、もしくは世界が直面するリスクから子どもたちを守るためのグローバル・プロジェクトで、大切に使わせていただきます。

はがきを送ってくださった皆さま、そして大量のはがきをていねいに仕分けしてくださった学生有志の皆さまに、心よりお礼申し上げます。



佐藤事務局長（左）と昭和女子大学の皆さま

協力校（順不同）
昭和女子大学 ボランティア委員会／甲南女子大学 Kalmia／南山大学 Potterゼミ／宮城学院女子大学 LACトライアングル／富士見中学高等学校 ボランティア委員会／創価大学Save Children Network／金沢医科大学 Pink robes／長崎県立大学シーボルト校 チームシーボルト／明治学院大学ボランティアセンター

※「プラン・ニュース」No. 112は、10月上旬にお届け予定です

支援者の皆さまからの声をご紹介！

事務局には日々、支援者の皆さまからさまざまな声が寄せられます。
支援を始めた背景や経緯など、皆さまの思いを今号からご紹介します。



広報マーケティング部
津田恵美 職員

入局以来10年以上支援者サポート業務に携わり、現在はおもにマーケティング業務を担当

「与えられる側」にもなっていました

独身時代に始めたプラン・スポンサーシップも、早いものでもう10年近くになります。その間に結婚して出産し、ライフスタイルが激変しました。仕事と子育ての両立に悪戦苦闘する毎日で、ともすると自分と家族以外のことまで気が回りません。そんなときにチャイルドからお手紙をいただいたり、会報誌が届いたりすると、自分の視野が狭くなっていることに気づいてはっとさせられます。少しでも社会貢献できたらと「与える側」のつもりでいたのが、逆に「与えられる側」にもなっていたのです。遠いチャイルドの成長もとてもうれしく、手紙が届くと、自分の子どもたちに話して聞かせています。まだ幼くてよくわからないようですが、世界のどこかにいるお友達に、子どもたちなりに思いを馳せているようです。「情けは人のためならず」と言いますが、まさにそのとおりです。(Oさん)



生活にさまざまな変化があったにもかかわらず、変わらず私たちと歩みをともにしてくださりありがとうございます。これからも、離れていてもチャイルドやプランの活動地を近くに感じられるレポートをつくっていきたいと思います！

自分の世界も広がりました！

スポンサーになったのは、私が20代だった1990年。個人レッスンの英語の先生が紹介してくれたことがきっかけです。彼女もスポンサーでした。寄付をするだけでなくチャイルドを紹介してもらい、手紙で交流できることに魅力を感じました。それまで南米には関心がなかったのですが、チャイルドとの縁でスペイン語やインカ文明を勉強するなど、自分の世界も広がったように思います。(Kさん)



チャイルドとの交流がきっかけで、興味が広がるって素敵ですね。チャイルドもそのことを知ったら喜ぶと思います。チャイルドが書いたスペイン語の原文が読めるのはすてきですね！



なかなか東京以外の地域で開催できず申し訳ございません。全国には有志の支援者の方が活動をしている「プラン支援者の会」があります。本誌15ページに活動予定が載っていますので、お近くで開催される場合にはぜひご参加くださいね！

東京以外の場所でもイベントを！

イベントがあってもほとんどが東京で開催されるので、ほかの地域でも行って欲しい。支援者同士の交流の場をもっと増やして欲しい。(Kさん)

チャイルドが成長する様子がうれしい！

チャイルドが少しずつ成長していく様子がレポートからうかがえることと、ときどきいただくチャイルドが描いた絵が、とてもうれしく思います。そして、チャイルドが成長し支援が終了するとの連絡があったとき、わずかであっても支援を続けてきてよかったなと思います。これからも少しずつ、支援させていただきます。(Wさん)



私たちが一番うれしいのは、チャイルドの暮らす地域からプランが役目を終えて撤退できることです。チャイルドを長い間見守ってくださっていた皆さまとその喜びを分かち合えるのは、私たちにも特別な喜びです！

※ウェブサイトでも皆さまから寄せられた声を紹介しています　https://www.plan-international.jp/about/voice/

プランのSNSをフォローしてください

プラン・インターナショナルのFacebook、Instagram、Twitterで活動国の情報や事務局の日々のあれこれを発信中！

※「国際NGOプラン・インターナショナル」で検索してください。

今号のプラン・ニュースについて、皆さまの声をお聞かせください

約3分程度の簡単なアンケートです

1 **QRコードで読み込み**
https://www.plan-international.jp/q/pn111/

2 **設問に答えてメールアドレスを登録するだけ**

回答くださった方のなかから抽選で、ささやかなお礼の品をお送りいたします。

PLAN NEWS
2019 SUMMER NO.111

公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン
〒154-8545 東京都世田谷区三軒茶屋 2-11-22 サンタワーズセンタービル 10F
TEL：03-5481-6100　FAX：03-5481-6200
www.plan-international.jp

表紙写真：ジンバブエ